

---

# 百獸の王

羽毛蛇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

百獸の王

### 【Zコード】

Z3875BA

### 【作者名】

羽毛蛇

### 【あらすじ】

世界中の生き物を見て回りたい。そんな夢を持った日本人が「OPENPIECE」の世界に転生し、主人公一行と「自分だけの生物図鑑」を作る為に旅に出ます。

作者の初投稿作品になりますので、シッコリビンが多々あるかも知れませんがよろしくお願いします。

## プロローグ（前書き）

はじめまして。作者の「羽毛蛇」です。

投稿は始めてですが、よろしくお願いします。

プロローグ

「ハケハツハツ！」

「…んあ？」

目覚めるとそこは見知らぬ砂浜でした。

いやいやいや、何処？マジで？

いや、落ち着け、まずは現状確認だ。俺は「藍沢 匠」中洲のN.O.・1ホストだ。酒に飲まれるなんて俺らしくもねえ。

あれ？ あれ？ 本名が思い出せん。

やべえな。相当酔っ払ってるみたいだけど、別に一日酔いつて訳でもなさそうだ。一時的な記憶障害か？世界中の生き物を見て廻る為の資金集めでホストなんかやつてんだから、記憶障害になるまで飲むなんて馬鹿らしい。まあ、酒は好きだけど。

てかここは本当に何処なんだ？百地浜？・・・百地にこじんな森はないな。ていうか俺は泳げないから海には近づかん。

まあ、じつとしていてもしょうがないし、じつか見覚えのある場所まで歩くか。流石に酔っ払つて福岡から脱出してゐることは無いだろ

うじ。

「「ケケッ！」！」

さて、歩き始めて1時間。

海です。ただひたすらに海です。

なんで？海岸沿いに1時間も歩き回って左手に海、右手に森。こんな場所はしらん。ていうか森つていうよりジャングル（？）に見えた。なんかジャングル（笑）から鶏の声聽こえてるのも意味不明だし、ちょっと見にいってみるか。鶏かわいいしね。

・・・・・・・・

結論から言おう。こんな鶏はいねえ！！

鶏冠があるし尾は鶏なんだが、体は何故か狸っぽかった。

U M A を発見したので取り敢えず捕獲。携帯で写メろうとしたんだけど、なんか携帯もなかった。この時点で俺は現状を夢だと断定した。何があつても商売道具の携帯を手放す訳が無い。

だから兎みたいな蛇がいても、ライオンみたいな豚がいてもしょうがない。スルーライフを決めこんだ。

・・・でも、この変な生き物を何処かで見たことがある気がする。  
大好きな漫画で。某ハンター漫画だったか？

そんな事を考えながらポケットからタバ「を探していると、

「それ以上踏み込むな！！」

何処からか、ていうか箱からモジヤンボが生えてる（笑）辺りから  
声がした。

ああ「ガイモン」だ。という事はこの夢は「ONE PIECE」  
か。「ONE PIECE」は2番目に好きな漫画なので暫く夢を  
観てるのもイイかな？

「くらあ！…無視すんな！…さつきからボケつとしゃがつて！早く  
そいつを放せ！…」

「そいつ？」

「お前が抱えてる鶏だよ！…放さなければ貴様は森の裁きを受け  
その身を滅ぼす事になるのか？」

やつぱ疑問系なんだ（笑）そんな事いわれても夢の中ではしか触れな

い不思議生物なんだから、そう簡単には手放せない。それにこいつはどちらかと云うと鶏っぽい狸だ。あれ？ そりゃ夢の中なのに、なんでモフモフ感を感じられるんだ？

「だから無視すんなつて……もういい。森の裁きを受けろオ……！」

ズドォン……

「……つてえ？」

なんだこの痛み？ チリチリと焼ける様な痛みがする頬を撫でると、手には真紅の血。

その生温い鮮血と徐々に麻痺していく頬の痛みは余りにもリアルで、俺は本当に「ZONE PIECE」の世界に来て仕舞つたんだと唐突に理解した。

## プロローグ（後書き）

いかがでしたか？つてまだ原作と絡んでませんけどね（笑）

小説つて難しいですね。『指摘・』『感想が』『ざいましたら、遠慮無くお願いします。

どんなにけなされようが最後まで投稿します。作者はしつこいし暇なので。

珍獸島（仮）でマシオカで叫ぶ（前書き）

地の分が多いですが主人公の過去なのでさめに見てください。

「やつた――――――」

「うおーーお・・・お前なんだーーーこきなりやった? つか? つか? なのか?」

だつて「ONE PIECE」だぞ！？珍獣だらけじやん！碌な遊び道具も与えられず英才教育だかなんだか知らんが物心ついた時から勉強ばかりさせられていた俺にとつて百科事典に載つていた動物たちの挿絵を見るのは唯一の楽しみだつた。

いつか自分の目でこいつらを見てみたい。夢の中での俺は世界中の動物たちと友達だつた。幼稚園のお受験には初步的な動物たちの知識も必要だつたからだろうか、両親は百科事典じやない動物だけの図鑑も頼めば買つてくれた。勉強は好きだつたからそんな感じで俺はいい子ちゃんに育つた。

小学校5年生の時、宿泊学習に友達が漫画を持ってきた。某ハンターが主人公のその漫画は俺の心を揺さぶった。衝撃だつたんだ。欲しいものを自由に追い求めるその職業が。俺は将来ハンターになる。

そんな子供らしき夢を持った。

家に帰つて両親にその話をする・・・キレた。それも烈火の「ご」とく。

そして俺は愚れた。「ちらも烈火の「ご」とく。『健全な精神は、強靭な（？）肉体に宿る』とか言って俺に空手と柔道、ついでにサバットまで習わせていたくせにメタボだつた親父は小学5年生にそりやあもうあつさりと負けた。

表面上は和解したが親父の関心が2つ下の弟に移つたのをいいことに俺は本格的にハンターになる準備を始めた。あの一件以来俺の頼みを大概聞いてくれる親父に頼んでネット環境を整え、知識を吸収した。中学3年になる頃にはさすがにハンターになろうとは思つてはいなかつたが、それでも世界の生き物を見て回ることは夢見ていた。

高校を卒業すると同時に家から放り出され、自分で生きていくことになつた。マンションの1ヶ月分の家賃しか払われてなかつたのであわてて仕事を探していたらホストクラブの店長に声をかけられ月締め即給というその店のシステムに引かれて入店した。

まあ結果を言えば天職だった。入店一ヶ月でN.O.・1になりそれから6年その地位を守り続けて稼ぎまくつた。少々贅沢をしても遊んで暮らせるお金はとつくにあつたのだが、俺は世界を旅するつもりなのでまだまだ稼ぐつもりだった。

いきなりこの世界に飛ばされてお金は無駄になつたが、この世界には元の世界じゃ考えられないような珍獣がわんさかい。楽しみでしうがない。

「聞けえ――――頼むから話を聞いてくれ（泣）」

「どうやら俺が長い回想に浸っている間、ガイモンさんはずっと俺に話しかけ、もとい呟んでいたらしく。懸念をしました。

「いやあ、すみません。この島にeredのがうれしくて」

「なにー?お前はそんな小さなりで海賊か?いや、鶏を放さねえ所を見ると密猟者か!?」

だから「こつは狸だつてのに、いやー回もシッじんでなかつたか。それはいいとして小さななり?俺は24歳、身長は186cmだぞ?小さくはないだろ?まあこの世界では身長3Mとかの人間がいるからでかくはないだらうが、そういうえば俺の声がずいぶん高く感じるし田線が低い。

?/?/?・・・いやな予感しかしねえ。

「おじさん鏡もつてゐ?」の子放してあげるから貸して?」

「鏡?ほれ。ちゃんとそこつ放せよ。」

ガイモンさんが鏡を放つてよこす。要求しといてなんだがガイモンさんが普通に鏡を持ち歩いてることに驚いたがこの際それはスルーダ。えらくかわいらしい「デザイൻ」にも驚いた（若干引いた）がそれもスルーダ。俺のスルースキルは割りと高い。

恐る恐る鏡を覗き込み愕然とする。

「誰だお前！？」

不意に思い出す。俺はバースデイベントであまりに飲みすぎて急アルで倒れたんだ。意識はあった。呼吸が止まつていぐのもなんとなくわかった。

「ああ、俺、死んだんだ」

どうやら俺は異世界漂流者ではなく、異世界転生者だったようだ。

ガイモンさんといっしょ（前書き）

ガイモンさんとの生活です。

## ガイモンをなんといっしょ

といつわけで俺は転生者だったようです。ちなみに転生してから浜で起き上がるまでの記憶はありません。ですが一緒に打ち上げられていたつぼにかばんの中にはかなり上質な紙（この世界では貴重なものらしい）で出来た分厚い動物図鑑、サバイバルナイフ、釣竿、キャンプ用品、手帳に筆記用具。せらには見た目7歳程度なのにかなり鍛えられた身体。おそらくこの世界で幼き頃の夢、ハンターを目指していたのでしょうか。さすが俺！ブレが無い！！

ガイモンさんによるとこの近海を昨夜大嵐が襲つたらしいので、それでこの島に流れ着いたのだろう。まあ俺のことだから最初からの島を目指していた可能性もあるが。

あ、俺の容姿を説明するとデビルマイクライのダンテだね。小さいけど。銀髪です。目まで灰色でした。何故でしょう？？まあイケメンなので許す！！元の世界でも顔はそこそこよかつたのであまり感動は無いがダンテは好きなキャラクターなのでそこはかとなく嬉しい。

必要最低限の事しかガイモンさんと話さず考え込んだりしている俺を最初は不審がっていたが狸（ここは譲れない）を開放したことと、動物談義をしたことによつて今は仲良くなつた。もはや親友だ！ガイモンさん今まで珍獣島を守つてくれてありがとう・・・（泣）この島にいる間は手伝うよー！

## Side ガイモンへ

可笑しなやつだ。

最初は海賊か密猟者かと思った。大海賊時代は子供に残酷だ。俺のいた一味みたに氣のいいヤツ等ばかりじゃねエ！－海賊に親を殺された孤児なんて五万といる。そんなヤツ等が海賊になることなんて別に珍しい事でもねえ。だが、どうやらこいつは違うようだ。このつの鞆の中身を見たときはやっぱり密猟者じゃねえかと思ったが、味の記録の為に一匹仕留める以外、必要以上には狩らないらしい。

どうやら生き物のすべてに興味があるらしく、姿や生態、食用時の味まで記録した動物図鑑を作るのが子供の頃からの夢だそうだ。今でも十分に子供だと思うのだがそのことを聞くとほがらかされた。

アイザワ・タクミとこう船とハンター（駆け出しらしこ）という職業だった事以外はほとんど覚えてないらしい。暫くこの島の調査をしたいと言い出したのでこいつの眼を見据えると真っ直ぐないい眼をしてやがった。2つ返事で了承してやると、

「俺たちは親友だ！－－－！」

なんて、じつぱずかしい」と言しながら抱きついてきやがった。

可笑しなヤツだ。

ガイモンとこの島で暮らし始めて2ヶ月が経った。島の動物たちの調査はあらかた終わり、今は釣りでその日の食料を確保しながら魚類の調査と、この世界の植物の知識をガイモンに学んでいる。まあガイモンにわかるのは喰えるか喰えないかぐらいのもんだが・・・

一人で生活するうちにガイモンは俺の料理の腕を気に入ってくれたようだ。俺は料理にはちょっと自信がある。世界を旅するためにはとサバイバル技術を元の世界で学んでいた頃、まずい飯は食いたくないと思ってサバイバル料理術を独自に学んだ。

仕事が休みの日は山奥の自然地にキャンプに行ったりして訓練をしていたので、レストランの厨房に慣れているサンジには負けないつもりだ。まあ作れるのは所謂The男飯だけなのだが・・・

ちなみに空の宝箱は確認済み。ガイモンはちょっと悲しそうだったけど原作ほど号泣はしていなかった。まあその理由はガイモンがこの島にいる期間がまだ3年だという事が大きいだろう。俺は暫くしたらこの島を出るつもりなのでガイモンも一緒に来ないかと誘つたのだが、

「森の番人を続けてエんだ」

と、原作どうりのことを言っていた。3年で自分の生涯をかけて守

つていいくまびの情を抱くなんてやつぱりガイモンはいいヤツだ。

## 悪魔の実（前書き）

主人公には能力者になつてもらいます。

## 悪魔の実

そんなこんなで日々を過ごしながらやろうやうにカダでも作ろうかな  
なんて考えていたある日、

「お～～い・・・タクミ～！珍しい果物を見つけたんだ！食つてみ  
ねエか？」

と果物を持つてきた。ガイモンにしては珍しくちゃんとカットされ  
ている。

「皮剥ぐ前に持つてきてよ。どんな果物かわからんないじゃん」

「あつ～すまねエな～お前エに植物の事教えるなんていいつときな  
がら。ま、じつにじつは俺も始めてみる果物だから～！喰え  
るかどうかはわからねエ～～」

「やついつ問題じやないんだけどなあ・・・」

「そう言いながらも、せっかくガイモンが採つて来てくれたんだし、  
ござとなつたら食中りに利く薬草もあるし（タクミが発見した）。

ということで取り敢えず喰つてみた。

何というか強烈な味がした。  
だが吐き出すのも見つともないので何とか飲み込んだ。

「ガイモン！－！なんだよこれ！－！滅茶苦茶まずいぞ！－！」

ガイモンはまだ笑つてゐる。ちょっとムカつく！一発殴つてやれりか？いやサバット仕込の蹴りを・・・・・いや・・・・・殺してやろう・・・・・・・・？・・・・！？

なんで!?俺はこんな事ぐらい一発軽めに殴つて赦してやる筈だ。  
こんないたずらファミレスで究極にまずいドリンクを作成して飲ま

せる遊びと変わらない。なのに俺はこんな事で一瞬だが本気でガイモンを殺そうと決意した。明確な殺意だ・・・

ふと我に返つてガイモンを見てみるとやう齎えている。

「ガイモン？？どした？？？」

努めて明るく聞いてみるが、尚も脅えた様子で、

「タクミ？？？？？さつきのありや何だ？？？？」

『わけがわからないよ』・・・ふざけてる場合じやなかつた。ガイモンの脅えつぶりは少々異常だ。まさか俺が霸王色の霸氣使えるわけでもないし・・・使えるのか?

試してみようと思い、やり方が解らないので先ほどと同じようにガイモンに殺氣を強く向けてみる。気絶したら後で謝るわ。

ガイモンは気絶こそしないが今にも叫び声を上げそうだ。霸王色が使えてるのか?と疑問に思つていると俺の目線が段々と上がっていき、それに合わせて体中に力が漲つてきた。腕を見ると太く毛深くなつてあり、立派な爪が生えている。

ガイモン愛用のかわいい鏡をガイモンのアフロの中からひつたくる。脅えるガイモンをスルーして鏡を覗き込み、・・・・一度吼えてみた。

「ガアアオオウ！！！」

そこには一風変わった百獣の王、銀髪の獅子がいた。

## 悪魔の実（後書き）

タイトルの由来です。

**銀髪の獅子（前書き）**

主人公の今後の方針が決まります。

”動物系”ネコネコの実 モデル ”獅子”

どうやらこれが俺の喰つた悪魔の実の名前のことだ。獣形態の姿からして間違ひ無いだろう。

俺はライオンが好きだ！むかしどつかのテレビ番組で陸上最強の生物はホツキヨクグマだの何だの言っていたがそんなモン知らん！最強の陸上生物はライオン！！俺は信じている！！！

だから喰つた悪魔の実がこの実だったことはすごく嬉しいし、人獣形態の自分を見たときはかなり興奮した！でも、悪魔の実を食べてしまった事自体が問題だ。

これじゃあイカダでこの島から脱出するのはメチャクチャ危険だし、なにより海中生物の調査が釣りに限定されてしまう。

俺が酷く落ち込んでいるのを見てせつさまで聴えていたガイモンが謝りつつ慰めてくれた。こんな姿（人獣形態から戻り忘れていた）の俺を怖がらないようにしてくれたなんて・・・ちょっとぴり箱が震えてるけど、やっぱりガイモンはいいヤツだ。

肉食系の凶暴性を抑えて人形態に戻る。この制御はかなり気を使う。自在に操っていたルッチ、ジャブラやチャカは凄いな。俺も練習しよう。

島の脱出はおそらく出来る。俺には航海术も無いがこの身体があればおそらく「六式」が壳つ「月歩」を極めれば何とかなりそうだ。この世界は空気に入つてんの?つてくらい鍛えればみんな強くなる。純粹に肉体が強化される動物系の悪魔の実を喰つたことだしこれが出来るようになるはず。

そしてなによりロビン……ロビン……好みなんです！タイ  
プなんです！－！好きなんです！－！大事な事なので三段活用しまし  
た。後悔も反省もない。早く3次元のロビンに会いたい！たぶん  
凄いよ！－！そりや凄いよ！－！何処がとは言わない。俺の6年間に  
かけて必ず墮とす！－・・・暴走はこれくらいにしておいた。

まあ口ビンと愉快な仲間たち（麦わらの一味）に入る事が出来れば俺の夢は安泰だろう。しかし、あの一味についていくには半端な覚悟ではだめだ！！よしつ 幸い原作が開始してルフィがここにやつてくるのは約17年後、今から鍛えてあいつらを待とう。俺は下準備

は入念にするタイプなんだ。「六式」会得を最低目標にできれば「**覇氣**」も身につけたい。

「よーしつー！待つてろ珍獸どもーー！」

### ♪ Side ガイモン♪

とんでもない事になつちまつた。地面に埋まつた箱に入つてたのに全く傷んでねエ果物なんていぐらなんでも怪しそぎるだろーーまさか悪魔の実だつたとは・・・アレ確か売つたら凄エ金額になつたんだよな・・・そういう問題じやねHだろーー！

俺は最低だこんなに落ち込んでるタクミに謝るか慰めてやるしかできねH。でもやつぱりこの姿はちょっと恐Hなと思つていたらタクミはまづだけこいつを見てから苦しそうな顔をして元の姿に戻つた。どこまで優しいんだこいつはーー！

俺は傍にいてやることも出来なくなつて少し離れたとこでタクミの様子を見守つた。暫くすると表情をいろいろ変えながらタクミはうろうろしだしたきつと悪魔の力を押さえつけるのに必死なんだ。俺のために・・・タクミが何かを叫んだ声ではつと我に返るとタクミは足をもつれさせて何度も転んでいた。

きつと身体をまともに動かすのも辛いのだろう。俺は誓つた・・・タクミがこの島を出れるときが来るまで、俺は何があつてもタクミの傍にいるー俺はお前の事も守るんだー！

「「剃」つて・・・やつぱいきなりは無理か地面を何度も蹴つて  
急加速ブルーノが言つた通りにやつたつもりなのに、「剃」つてえ・  
・・・」

ガイモンがこっちを見てる。あんまりかっこ悪いといふ見られたくないし、もうチョイ練習して出来なかつたら基礎体力からつけ治そ  
!!

ガイモンはいいヤツだ。

## あれから18年（前書き）

修行時代はとばします。主人公とガイモンさんじゃ無理です。絶対に面白くない。

投稿を始めたばかりなお気に入り登録が4件もあってとても嬉しかったです。もらつた評価はやはり厳しかったんですが・・・

びしひ指導しちゃつて下れい。

「みなさんお久しぶりです。藍沢 匠です」

・・・はあ俺は誰に向かつて喋つてんだろ？麦わらの一昧に入ると勝手に決めてから18年経ちました。おかしくね？俺はガイモンさんにしか関わってないはずなんだから原作が崩れる事は無いはず。ということは原作でのガイモンさんの20年発言は約20年という事だつたらしく俺は去年1年間無駄に心を躍らせ続けた。こんなことなら修行を全力で続ければよかつた。

修行の結果を上げると俺の「六式」はほぼ完成した。身体作りに10年かけたかいもあり「剝」「月歩」「嵐脚」「指銃」は問題無い。けど「紙絵」「鉄塊」に関しては性能のテストに限界があった。

まず「紙絵」。これはこの島で俺を除いての最速はガイモンさんのピストル。これが問題だつた。この世界にはピストルよりも早い攻撃をする人間がいくらでもいる。ピストルの弾を避けられる人間もいくらでもいる。正直メチャクチャな世界だと思うが俺もこの世界で生きていく以上「紙絵」は覚えたい。俺は痛いのは嫌だ！

次に「鉄塊」。これも最初はガイモンさんのピストルで特訓しようとしたのだが「紙絵」の後に特訓を開始したのがまずかった。ビビりな俺は反射的に「紙絵」でかわした。・・・なんかごめんなさい。でも理論はなんとなく解つてゐる。身体を鉄の高度に高める。正直これは筋肉どうもあるが「生命帰還」の技術も入つてゐると思つ。

だつて斬撃で皮膚が切れないんだから、皮膚も操るんでしょう？皮膚を操る感覺つていうか、操れてるのかよく解らんから髪をまずは操つてみた。・・・5年かかった（泣）「鉄塊」つてこんな複雑か？たぶん修行法を間違えたんだろう。それかセンスの問題？とにかく人獣形態の「たてがみ蠶鉄塊」でピストルを防げることを確認した後、身体の各部でピストルを受けることにも成功した。ちなみに全身に「鉄塊」かけて動くのは無理だった。ジャブラは本当に凄い！…まあこれも想定外の威力は当然あるから徐々に実験していきたい。

まあ「六式」の前4つは失敗してもこちらにたいした損害が出ないので完成としているだけで、まだまだ上を目指すつもりだ。ちなみに一番とくいなのは「嵐脚」！…いづれ披露したいねえ！！

あ！「霸氣」は普通に無理！！理論も何も訊いてないし。どんな修行をしていいかすら解らなかつた。

「月歩」で海を涉ろつの「コーナー」も実施されておりません。ライオンらしく持久力は皆無なようで跳んでいられる時間は精々10分ほどだね！応用技の「剃刀」ともなると1分持たないしね・・・そんなこんなで最近は「生命帰還」と「剃刀」の修行に集中。

スリムな人獣形態を維持しながら「剃刀」で島の外周を高速パトロール。万が一、主人公一行が通り過ぎようとしたら無理やりにでも船に乗り込む！！見た目はすっかりダンテ！髪は「生命帰還」に使いやすいように伸ばしてます。某ハンター漫画の「円」みたいなことができますよ。近距離に死角はありません。

そういうえばガイモンさんはここ数年畑を始めて隠居生活。森の番人に俺が加わるようになつて海賊も密猟者も激減したね。そのせいで

銃の調達にちよつと苦労したりもした。最近は料理も出来るようになつて晩飯はガイモンさん担当。16ぐらいから食後にガイモンさん特性の濁酒みたいなので晩酌している。

そんな今日この頃。

パトロール兼修行を中断し、浜邊で休憩をしていたら、

「なあつた――――つ――――！」

沖合いから微かに声が聞こえた！

来た！――ナミに警戒されたら困るので双眼鏡を持つ前に森の入り口付近に身を潜めて様子を伺つ。

一隻の船は真っ直ぐにこちらに向かつてくる――

俺の胸は高鳴る――ついに会えるんだ、俺の仲間――未来の海賊王に――！

## あれから18年（後書き）

ここまで難産だった・・・次回からは一味との絡みが始まるので会話もやや増えるでしょう。

麦わらの一昧”ハンター”アイザワ・タクミ（前書き）

一味に合流します。

## 麦わらの一昧”ハンター”アイザワ・タクミ

（Side ルフィ）

「孤島に着いたぞ！！・・・・・・・・・・何もねエ島だなア！！  
森だけか？」

「だから言ったのに無人島だつて。仲間探すのにこんなとこ来てどうすんのよ」

島の感想を言つたらナミのヤツ軽く呆れてらア。でもなんとなくい  
ると思うんだけどなア新しい仲間！！それもとびつきり頼りになる  
ヤツが！！！

そしたら森の向こうから銀色の鬱をたなびかせて、でつけエライオ  
ンが歩いてきた！！本能で解る！あいつはバギーンとのライオン  
とは違エ！！

（Side Out）

出来る限り威厳を見せながら、俺は獣形態でルフィたちの前に姿を現す。それと同時にルフィの鋭い視線がこちらへと向けられる。あれ？？ルフィなら面白がって「あのライオンを仲間にするーーー」とか言つのかと思つたんだけどなんか警戒されてる？？

「ルフィー！！ライオンよーーなんでこんな所に居るのかしら？？珍しい色だし捕まえたら高く売れるんじやない？」

ナミ・・・そりやあないだろ（泣）ここまで金の亡者だつたとは、いや[冗談だと信じたい。そんな事を考えているとルフィが静かに口を開いた。

「お前・・・強エ工な。なんとなく解る。」

・・・？？？なに？？このルフィのテンション？予定と違うんだけど？？このままじゃ仲間を守る為に決闘とか言い出しかねないし、人形態に戻つて話をしよう。

「君も強そうだねえ。この獅子の姿を前にして逃げるでもなく、構えるでもなくただ認めるヤツなんて初めてだ」

「・・・・・・」

突然人の姿になつた俺にナミは息を呑む。

「驚かせてしまつてすまないねえ。俺はアイザワ・タクミ、ネコネコの実を食べたライオン人間だ。今はこの森の番人をやらせてもらつてるよ」

「ネコネコの実のライオン人間つてアンタも悪魔の実の能力者な訳！？」

「そうだねえ動物系悪魔の実を食べた人間はその動物の力を取り込む事ができるんだ」

「あいかわらずメチャクチャだわ！悪魔の実つて！まあいいわ所で森の番人つて？」

ナミは俺の存在をそういうもんだと割り切つたようだ。適応能力高いなあ！

「ああ、この森にはたくさんの珍獣が生息していてね、珍獣狙いの密猟者が後を絶たないんだ。だから俺があの姿で追い払つてるつて訳さ」

「なるほどね」

「……やつらが逃げね時はビリすんだ？」

ナリの疑問が解消されると先ほどまで黙っていたルフイが聞いてきた。

「ちからを力ぬくでお帰ついただいてるよ。」

「ははっ！…やつか。まよお前H強えんだなー。」

今度は間を置かずにルフイは答えた。

「それなりに鍛えてはこるよ。俺には夢があるからねえ」

「夢？？」

「ああ生まれる前から決めていた夢さーーこの世界には俺の知らない生き物がこの島の珍獣の何千倍ついているんだ！！いつか信頼できる仲間と共に、俺は世界を巡つて自分だけの生物図鑑を作るーー。」

「・・・お前の夢、俺の船で叶えねえか？」

「！？・・・お前の事を俺は何にも知らないぞ？そんなおま『俺はモンキー・D・ルフィ！』海賊王になる男だ！――いいから俺の仲間になれ！――！」つ――？」

「・・・そうかい・・・よろしく！キャブテン船長！――！」“ハンター”ア  
イザワ・タクミ！これより一味の『』厄介になる

## Departure (離発行)

YY好きなんです。

お隣に入りが11件で、本邦11件であります。今田はこかねといまでございます。

「ヤシ・・・計画ビリッ！――

いやあ焦った――つまり事仲間になれたよ。なんか紳士な態度とつ  
ちゃつたしこのまま押し通すか！やつぱねえルフィは守るための強  
さ――夢のための強さ――この一つを認めると思つたんだよね――警戒さ  
れた時は本当にどうしようかと思つたけど、まあ何とかうまくいっ  
たね。

今はお世話になつた人に挨拶に行くと言つ俺にルフィとナミがついて  
きてガイモンと四人で馬鹿話をしている。俺がこの島にどどまる  
わけになつた。ガイモンの悪戯の話をしていると

「タクミは珍獸のおつさんも守つてたんだな――」

「ブッ――すばぞ――」

とこうやり取りもあつた。でもその後に別れの挨拶をする時はルフィ  
は笑つてた。ナミも笑つてた。

俺とガイモンは・・・やつぱり笑つてた。漫画で読んでたときには  
ガイモンのことなんか表紙連載で樽娘と一緒に出てくるまですつか  
り忘れてた。でも今はガイモンのことを本当の親父だと思つてる。

名前も覚えてない元の世界の親父、名前どころか顔も覚えてないこの世界の親父、生きてんのかなあ？何となく一人とも生きてる気がする。でも、俺の親父はガイモン。これまでも、これ「りも。

だから、さよならは言わない弁当もつて浜辺に出かけるときみたいに振り向かないで、でもいつもより心を込めて、

「ガイモン……いつできます」

「ああ……いつでいい、タクミ」

……またね……親父。

（Side ガイモン）

いつもなら昼の休憩が終わってまた訓練でも始める時間なのにタ

タクミが畠にやつてきた。後ろからついてくる一人を見てとうとうの時が来たのだという事を悟つた。

タクミが世話になつた人に挨拶をしたいなんて殊勝な事を言つてきやがつたかと思えば人のことを珍獸呼ばわりしやがつて、ふざけた船長の船をタクミはえらんだもんだ。おまけにタクミまで腹抱えて笑つてやがる。ライオンとのあいの子みてエなタクミのほうがよっぽど珍獸だ。まあ、あれは俺のせいか、それなのにタクミは俺を攻めなかつたそれどころか俺と今まで一緒に居てくれた。

侵入者対策の罠の位置を注意したり、薬草の煎じ方なんかを紙に書いていたものを渡してくれたりと最後まで俺の世話を焼こうとしていたが伝える事がなくなつたのか笑顔のまま歩き出す。

だから俺も笑顔を返す。タクミは毎朝浜辺に出かけるときみたに自然に振り向きもしないで俺に手を振る。

「ガイモン……いつできます」

「ああ……いつでいい、タクミ」

・・・泣いてんじゃねえ・・・馬鹿息子。

{ Side Out }

## Departure (後書き)

主人公はガイモンの元でいい子ちゃんに育てなおされました。ガイモンから離れ偶には腹黒くなるかもしません。

ナミヒコロヒ庵と（前書き）

珍獸島ですつと寝ていた漢との初対面です。

ガイモンと森の中別れ、俺は食料が無いと言つルフィの為に果物を山ほど積んでやつた。・・・ナミの船に。単純な話だ、ルフィの船に積んだら沈む。

「果物だけか？肉ねエのか～に～～く～～」

困つたヤツだ俺がこの島の動物たちを守つてきたつてこと忘れてんじやないのか？？

「魚でよければ後で売れるほど釣つてやる。この島で肉が喰いたいなら俺を倒せ！～！」

「・・・・！？おつ俺が言いたかったのは魚肉だ魚肉！～お前と珍獣のおつさんが守つてきた島だつて忘れてたわけじゃねエぞ！～・・・・ほつ本当だぞ！～！」

「嘘へたつ！～！」

果物を積み終わつてルフィの船に向かおうとすると

「ちゅうと待つで。あんたはこいつー！」

ナミに呼び止められた。

「どうしたんだい？ 僕が居ないと寂しいのかい？」

「・・・アンタそんなキャラだったつけ？ まあいいわ、そっちの船にアンタみたいなライオンが乗つてたら船は沈むわよ。あたしの船のほうがこくらかましだから、あんたはこっちに乗りなさい！」

「わかったよ」

俺はナミの船の出港を手伝つ。ルフィの小船のほうではゾロがまだ寝てる。カバジとの戦闘で負つたはずの傷は大丈夫なんだろうか？ 少しだけ心配しながら俺たけの2隻は珍獸島を後にする。

出航して暫くして俺は航海が安定しているのを確認して、

「といひでお嬢さんのお咎めは？ まだ聞かせてもらひてなかつたと思つただけ？」

「あら、そうねなんかいつの間にか溶け込んでたから。わたしはナミ今はそうね、雇われ航海士つて所かしら？ よろしくねライオンのタクミ」

「ライオンのつて・・・まあいいやナ!!」せ一味の仲間じゃないのかい?」

「手を組んでるだけよ！わたしは海賊が嫌いなのよ！」

「あんなに楽しそうに笑つてて説得力無いなあ」

ナリは若干照れてるようだ（笑）あくまでもかいつかいつのよくなこので「机嫌をとる」としてこのと

「ああ……よべ寝た。」  
てめは誰だ?「

「よつやく起きたのかい？手負いの獣君。俺はアイザワ・タクニ。この一味に加わる事になった。よろしくな！腹あ怪我してるんだろ？診てやるつか？」

「・・・俺はゾロノア・ゾロだ。この程度の怪我は何でもねエーお前は医者か？ そうは見えねエが

「俺はハンターだ！ 生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。いろんな場所にサバイバル技術として医術と料理は少し齧つてるンだよ。じゃあ良治の水はどうだい？ 次の目的地までひまなんだろ、う、付き合ってくれよ」

ゾロにはこれだ！ ガイモン特製の濁酒を掲げるとゾロは笑みを浮かべる

「いいねエ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えらんねエからな」

「見たことないお酒ね！ わたしもつきあつわよ？」

「俺の親父の血廻の酒さね！ たっぷり積んだんださあ呑もうー！」

それから数時間、三人からこれまでの航海のことを聞きながら呑んだ。ゾロは酒を飲むときはそれなりに陽気になるようだしねナミも楽しそうだ。いい飲み友になれそうだ。

初めてコイツを眼にした時は久々に血が騒いだ。カバジとかいう芸野郎なんかと戦つたが何の収穫にもならなかつた。剣士としてのはるか高み、その頂点、大剣豪。俺はくいなに誓つたんだ！俺が警戒しながら声をかけたのにコイツは俺の事を手負いの獣なんてからかつたかと思えば、名を名乗りそして一味に加わったのだと俺に告げ、治療を提案してきた。

俺も名を名乗り、治療は拒否する。正直コイツは医者には見えね！刀を持つてる風でもねえのにコイツからは剣士のような獣のような威圧感を感じる。だが見た目は隙だらけ。俺が困惑しているとちよつと苦笑いしながら

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。いろんな場所にサバイバル技術として医術と料理は少し齧つてるんだよ。じゃあ良治の水はどうだい？次の目的地までひまなんだろ、付き合ってくれよ」

なんとなく解つたコイツは警戒を解くために隙をみせ、同じ酒を飲み交わすことで仲間になろうとしているんだ俺も警戒を解いたフリをして

「いいね僕俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えら  
んね僕からな」

意外に鍛錬の代わりであると伝える。マイツは鈍そうな風でもね  
のに俺の言葉を素直に受け取った様に親父の白麪の酒とやらを出し  
てきた。たいした役者だ。

ナミも交えて酒を酌み交わしはじめてどれくらい経つだろ。当  
初の俺の疑念は霧散し、今は俺もこころから酒を楽しんでいる。様  
々な言葉を交わしたがタクミの言葉には嘘も裏も無い。眼を見りや  
解る。話を聞くにこいつから放たれる威圧感は悪魔の実とタクミが  
習得している武術にあるようだ。凶暴性を高める悪魔の実の力をタ  
クミは精神力で押さえ込んでいるらしい。夢のため、タクミは鋼の  
精神を持っているのだろう。タクミの夢なら少しじぐらに手伝つてや  
つてもいい、仲間でいる方が面白そうだ。

でも1回くらい戦つてみて僕な・・・酔つた振りして1回くらい  
駄目かな?

↓ Side ルフィー

俺は酒を飲まね僕から肴の干物をずっと齧りながら時々話しに参加

した。三人は楽しそうに酒を飲みながら以前からの仲間のように打ち解けている。それはいい、・・・でもよ

「タクミ・・・魚肉は?」

{ Side Out }

「あつー?」

ナリヤロと庵と（後書き）

」のあとは暫く魚釣りタイムでしようね。

## ナミの気持ち（前書き）

評価5をくれたどこかのアナタ！！感想を……感想を下さい……！  
！めっちゃ嬉しかったテス！！！

穏やかな波の上を1隻の舟は漂つ。

「タクミ・・・なんか雰囲気悪いんだけど、どうにかならないの？」

「・・・酒」

はいっ只今の俺はメチャクチャ不機嫌です！！何故かつて？それはガイモンブランドの濁酒が僅か3日で無くなつたから・・・・ありえねえ・・・・まあね、3人で楽しく呑んだんなら俺だつて納得だよ！？でも犯人は単独犯！！

俺の視線をこの2日間一手に引きつけるこの男！麦わらのルフィ！！毎日酒盛りしている俺たちが羨ましかつたのかルフィは俺たちが寝静まつた真夜中こつそり濁酒を呑みそして暴れた。それを見てさすがに俺も頭にきたがルフィには効かない拳骨でその怒りを若干発散し、爆発寸前だった俺をゾロが何か諫めた。

まあ俺も悪いんだけどねえ。ルフィが酒に強い描写がなかつたから3日目に酒と肴の美味さを語る俺にルフィが、自分も飲みたいと言い出したとき、あのとき飲ませておけば暴れだしても何とか止められただろうに。予想通り酒に弱くさらには極度の酒乱であつたルフィは暴れて酒樽と舟一隻を大破させた。

でもそんなことでは納得いかないじけている俺に対して、我慢できないナミは珍獣島に一度引き返す事を提案したぐらいだ。俺もいつたん了承しかけたがあれだけ仰々しく別れを告げたにも関わらず1週間で帰郷するのをさすがに気まずいので断つた。

このままグランドラインへと向かうには装備（船）と準備（酒）が不足しているところナミの意見に従い舟は一路シロップ村を目指す。

Side ナミへ

「はあ～」

わたしは今日何度も解らない溜め息をつく、ルフィは「肉」以外の単語を知らないみたいだし、ゾロはだいたい昼寝をしている。何より溜め息の原因はタクミ、2日前夜中に物音がしたので起きてみれば、割れた酒樽の近くで暴れているルフィとそれを見て固まっているタクミ。あのお酒はガイモンさんが作ったお酒らしくタクミに取つては大切なものの。きっと飲み終わつても樽は取つておくつもりだつただろう。

タクミの性格上、怒り狂うことは無くて悲しんでいるはずだ。せめて慰めてあげようと1歩足を進めるとタクミが目の前から消え轟音と共にルフィが床にめり込んでいた。起き上がり尚も暴れようとするルフィを捕まえゾロが眠っている舟の方向に思いつきり投げつ

けた。

舟は大破し海に浸かつてもう暴れなくなつたルフィを抱えてゾロがこちらの舟にやってきた。ゾロに文句を言われてタクミは段々と落ち着いていったようだが今のはなんだつたんだろう。本当に消えたように見えた、タクミならもしかしてアーロンに勝てるかも?と一瞬考えたが慌てて首を振る。

イーストブルー  
東の海にアーロンに勝てる海賊も海兵もいない!そんなのは「コヤシ村では常識だ!村はわたしが守る。

翌日のタクミはいつも通りの態度ではあつたが雰囲気が違つ。ルフィは酔つていた間の記憶がすっかり無くなつてゐるようで

「何か酔つ払つて迷惑かけたらしいな!…ごめん!…」

とノリは軽いが謝つていたのでタクミは赦したのだろうが…ダメだ!…この雰囲気にわたしが耐えられない。タクミにはいつものように笑つていて欲しいから一度引き返そうかと提案したが寂しそうに断られた。この間の事を恐がつてると思われたのだろうか?

そんな事は別に無いタクミは優しいし気を使う事ができる人間だ。ルフィがゴムだから殴つて止められないと思つてゾロのいる海に投げたのだろう事は解つてゐる。まあ加減と方向を若干間違えたようだつたけど。誤解を解こうかと思つたけど止めた何を考えているんだろ?いざれ裏切る事になるタクミにどう思われたつて関係ない!

でも近づいているであらう別れを想つとひょつとだけ寂しくなる。

ちゃんと裏切る事ができるのかな」こつらいにヤツだもんなんあ・・・

とりあえず物資補給の為、まあ落ち込んでいるタクミの為にお酒を  
買つてあげたいという気持ちが強いのだが、南のシロップ村に立ち  
寄る事にする。

残り少ない航海をわたしは出来るだけ楽しもうと思う。

Side ルフィー

「肉を食つべ……！」

side out

## ナミの気持ち（後書き）

何かルフィイがネタキャラになつてゐる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3875ba/>

---

百獣の王

2012年1月10日21時49分発行